

主 題：悔い改めとは何か？

聖書箇所：ゼカリヤ書1章1－6節

テーマ：聖書の教えている悔い改めとは一体何なのか？

きょうは、皆さんと一緒に「悔い改め」について改めて考えてみたいと思います。さっそくですが、一つ質問です。もしだれかに「悔い改め」とは何ですか？と聞かれたら、あなたはいったいどのように答えるでしょう。「悔い改め」ということば、これ自体は何も珍しいものではないと思います。これまでも教会生活のさまざまな場面で、一度は聞いたことがあるでしょう。何より聖書を開いて見れば、文字どおり多くの場所で「悔い改め」ということばは出てきます。

たとえばイエス様が地上での働きを始めた時、最初に口にしたことばは何でしたか？それは「悔い改め」に関することでした。マルコ1：15に記されている「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」、このようなことばをもってイエス様は働きを始めていました。ではイエス様が地上を去って天に戻る前、最後に口にしていたことばは何でしたか？それも「悔い改め」に関することでした。ルカ24：47－48に「:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。:48 あなたがたは、これらのことの証人です。」と記されています。もちろんイエス様だけが「悔い改め」について語っていたのでもありません。旧約聖書を見れば、預言者たちも、イエス様が去った後その働きを受け継いだ弟子たち、ペテロやパウロにしても同じように人々の間で、繰り返し「悔い改め」を説き続けていました。彼らは救いにおいて「悔い改め」が絶対に欠かせないものであること、また救われた後の歩みにおいても、「悔い改め」が絶対に欠かせないものだということを大胆に教え続けていたのです。

そして、私たちはいろいろな場面でこれまでにそんな教えを耳にしてきたことでしょう。「悔い改め」の大切さや「悔い改め」の必要性を教会学校で聞いたかもしれませんし、礼拝の中で聞いたかもしれません。ほかの兄弟姉妹と話している時に、「悔い改め」ということばを頻りに耳にするかもしれません。でも実際はどうでしょう。「悔い改めは何ですか？」と改めて聞かれれば、自分のこととして本当に理解しているのでしょうか？私たちが勝手に思い浮かべるものではありません。神様が望んでおられる私たちの救いや信仰生活にも関わる心からの「悔い改め」を果たして私たちは一度でもなしたことはあるのでしょうか？きょうは、私たちひとりひとりにとって、大切なその教えをいま一度神様のことばを通して一緒に考えてみましょう。

### ○悔い改めとは：三つの事実

そして、そのことを学ぶために、この朝、私たちが見ていくのはゼカリヤ1：1－6のみことばです。もしかしたらこの書は多くの人にとって余り馴染みのないものかもしれません。正直に一度も読んだことがないという人もいるかもしれません。ゼカリヤ書は、旧約聖書の最後から二番目の書です。そしてこの箇所を私たちは見ていくわけですが、この箇所を通して、神様は私たちに「悔い改め」とはいったい何か、大きく分けて三つ、大切な事実として教えてくれていました。順番に一つずつ考えてみましょう。まずはいつものように、みことばを先にお読みしますので、それぞれ神様のことばによく耳を傾けてください。

#### ゼカリヤ1：1－6

「:1 ダリヨスの第二年の第八の月に、イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤに、次のような【主】のことばがあった。:2 【主】はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた。:3 あなたは、彼らに言え。万軍【主】はこう仰せられる。わたしに帰れ。——万軍の【主】の御告げ——そうすれば、わたしもあなたが

たに帰る、と万軍の【主】は仰せられる。:4 あなたがたの先祖たちのようであってはならない。先の預言者たちが彼らに叫んで、「万軍の【主】はこう仰せられる。あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ」と言ったのに、彼らはわたしに聞き従わず、わたしに耳を傾けもしなかった。——【主】の御告げ—— :5 あなたがたの先祖たちはいま、どこにいるのか。預言者たちは永遠に生きているだろうか。:6 しかし、わたしのしもべ、預言者たちにわたしが命じた、わたしのことばとおきてとは、あなたがたの先祖たちに追い迫ったではないか。そこで彼らは立ち返って言った。「万軍の【主】は、私たちの行いとわざに応じて、私たちにしようと考えられたとおりを、私たちにされた」と。」

## 1. 悔い改めとは神様からの恵み 1-2 節

では、さっそく一つ目の事実から考えてみましょう。「悔い改め」に関する一つ目の事実として挙げられるもの、それは「悔い改め」とは神様からの恵みだということです。言い換えれば「悔い改め」とは、私たちの知恵や力で手にするものでも、懸命な努力によって勝ち取るものでもありません。それはまず何よりも決してそれに値しない者に神様が与えてくださる贈り物、恵みのギフトだということです。もう一度、1節からよく見てください。このように始まっていました。「ダリヨスの第二年の第八の月に、イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤに、次のような【主】のことばがあった。」と。これを読んで、ある人は率直に思ったかもしれません。ただ年代が記されているこの箇所から私たちは何か学ぶことができるのでしょうかと。もちろんたくさんを学ぶことができます。もっと言えばこの箇所は、きょう私たちが見ていく内容を理説する上で、大切な歴史的な背景を教えてくれていました。

### ▶「ダリヨスの第二年の第八の月」

特に、注目してほしいのが「ダリヨスの第二年の第八の月」ということばです。このことばを頭の片隅に置いてもらって、すでにご存じの方もいるかもしれませんが、預言者ゼカリヤが働きを始めたのとほぼ同時期に、同じように主に召されたひとりの預言者がいました。それはハガイと呼ばれる人物でした。私たちが今見ているゼカリヤ書の一つ前の書に移すと、そこにハガイによって書かれたハガイ書があります。それはこんなことばで始まっていました。ハガイ 1 : 1 「ダリヨス王の第二年の第六の月の一日に、預言者ハガイを通して、シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアとに、次のような【主】のことばがあった。」と。ゼカリヤが働きを始める二月ほど前に、ハガイはイスラエルの民に主のことばを伝えていたのです。

ここで覚えていてほしいのは、この当時のイスラエルの民は、長い間囚われていたバビロンの地から戻った直後だったことです。またその帰還の際に、彼らは神様から一つの重要な務めを与えられていたのです。その務めとは、エルサレムの町で壊れたままになっている主の宮、神殿を建て直すことでした。人々は、神様を礼拝するために神殿を再び建設するようにと神様から任務を託されて、自分たちの国に戻っていたのです。そして実際イスラエルの民たちは、最初その務めに一生懸命に励んでいました。やっと自分たちの故郷に戻ることでできた彼らは、神様の前に喜ばれることを熱心にしようと努めていたのです。でも次第に彼らはいろいろな困難や、葛藤に直面することになりました。もちろん想像できると思いますけれども、神殿を建てようとする、多くの労力や犠牲を払わなければならなかったのはいうまでもありません。でもそれと同時に、当時彼らは彼らのことを憎む多くの敵たちによって妨害や圧力を受けて、それによって彼らは苦しむようになっていました。

またそれに加えて、彼らは、自分たちが今建てている神殿が、かつてソロモンの時代に建っていた美しく壮大な神殿と比べると余りにも劣っている様子を目の当たりにするのです。そしてその結果、イスラエルの民たちは、大きな落胆や失望を覚えるようになりました。彼らは、神様から託されたその務めを一生懸命やっているけれども、これはむだではないのかと、多くの犠牲を払ってやっているけれども、こんな小さなみすぼらしいものだったら、結局のところは意味がないのではないかと。神様のため

に働いているけれども、いろいろな敵に苦しめられている私たちのことを神様は忘れてしまったのではないかと思ったのです。

こうして失意を覚えて、熱意を失ってしまった彼らは、神殿を建てることに無関心になっていきました。主の宮を建て直すという神様からの務めに、忠実であるのではなくて、逆に神様に対して疑いやためらい、拒絶を覚えるようになっていたのです。想像できますか？立ち止まって考えてみてください。イスラエルの民たちは一つの大切な務めを与えられていました。でも彼らはその務めを忠実に果たそうとしなくなっていました。このような者たちを前にして、神様はどのように応答されたでしょうか？いつまでも変わらないその民の愚かさにあきれ果てて、彼らに対してすぐに怒りを示されたでしょうか？彼らの余りの頑なさに、神様は彼らにすぐにさばきを与えたでしょうか？そうではありませんでした。あわれみ深い神様は、まず最初に、預言者ハガイを通して、失意に陥っている彼らに向かって語られているのです。そのことばがハガイ書2：1にこのように続いていました。ハガイ2：1「1 ダリヨス王の第二年の第七の月の二十一日に、預言者ハガイを通して、次のような【主】のことばがあった。」、少しとんで1－9節に神様は彼らにこう語られたわけです。「：7 わたしは、すべての国々を揺り動かす。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。万軍の【主】は仰せられる。：8 銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の【主】の御告げ——：9 この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の【主】は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。——万軍の【主】の御告げ——」と。

神様は何をされていたでしょう。神様は、苦しみの中、落胆していた民を励まされていました。敵の妨害を受けて難しさを覚えている者たち、かつての宮と比べて、虚しさを覚えている者たち、そのような者たちに対して、神様は罰ではなく約束を与えられたのです。神様は言われていました。あなたがたが建てているこの宮は、確かにいまは大したことがないように見えるかもしれないけれども、この宮を通して、わたしはいつか自分の大いなる栄光を現そうと、だれも見たことがないようなすばらしい祝福をこの宮を通してもたらそうと。ソロモンの時代とも比べることができないすばらしいものをわたしはもたらそうと。そして、あなたがたの今の苦しみや葛藤が大きな喜びに変わる日がやって来るのだと。神様は人々の目を今ではなく先の約束に向けさせていました。そして先の約束を通して、落ち込んでいる者たちに、希望を与えていたのです。神様は、いろいろな問題を抱えていた民たちに呆れ果てて、彼らを見捨ててしまうことはありませんでした。そうではなくあわれみを示し、将来の約束と祝福に心を留めさせることによって、彼らの心を励まし奮い立たせていたのです。

イスラエルの民に対する神様の働きは、ここで終わりではありませんでした。ハガイを通して、希望を与えた神様は、その約束と祝福をさらに詳しく民に教えようとされました。それは、イスラエルの民たちにその詳細と励ましを与えるために、ハガイとは別に、もうひとりの預言者を立てようとされたのです。そしてその人物こそ、ハガイのことばの後、「ダリヨスの第二年の第八の月」に立てられたゼカリヤだったのです。ゼカリヤという名前には、「主は覚えておられる」という意味がありました。つまりこのゼカリヤ書は、「最初から最後まで主は忘れていない」と、「主はすべてのことを覚えている。」と。イスラエルの民たちは、いろいろなことに混乱して、希望を失いつつありました。しかしそんな彼らに対して「神様は覚えている」と、当たり前ですけれども、神様は私たちとは違います。私たちは、いろいろなことを容易に忘れてしまうことがあります。自分の発したことばや約束を時間がたてば覚えていないこともあります。しかし神様はそうではありません。このお方は、ご自分のことばや約束のすべてをいつまでも変わらずに覚えておられるお方でした。そしてそんな神様がイスラエルの民たちのことを覚えていたのです。さまざまな困難や葛藤に直面して、大きな落胆や失望を覚えて、主の宮を建て直すという務めに疑いや葛藤を覚えているような者たちのことでさえ、神様は決して見放さずに忘れることはなかったのです。

このような背景の中であって、神様がゼカリヤを通して1番最初に言われたこと、それが「悔い改める」ということでした。「わたしに悔い改めなさい」と、そして覚えていてほしいのは、悔い改めは、彼らにとって何か当然値したものではなかったということです。ゼカリヤ書に戻って1:2にこのように書いていました。「【主】はあなたがたの先祖たちを激しく怒られた。」と。まさにこのことばは真実でした。以前のイスラエルの民たちは、主の前に悪に悪を重ねて、その罪のゆえに激しい神様の怒りに何度も遭っていました。本来であれば、聖く正しい神様の前に罪を犯せば、その罪ゆえにさばきが与えられて当然でした。考えてみてください、ましてや「神殿を建てろ」と言われているのに一向に建てようとしなかったその当時の民たちは、神様の怒りを受けて当たり前の存在でした。

しかし、神様はそんな者たちに対して、あわれみを示し、そして彼らが神様のもとに立ち返る悔い改めの機会を与えられたのです。だからこそ、私たちは忘れてはいけません。まとめると「悔い改め」をすることができるその機会は、私たちがそれに当然値する存在だからなのではありません。本来なら罪を犯したその瞬間に、神様の怒りやさばきが下ってもおかしくないような者に対して、神様が怒りではなく、恵みを示してくださったからこそ、私たちは神様に悔い改めることができますのです。だからこそ「悔い改め」を考える時に、私たちが一番に覚えておかなければならないことは、それは神様の恵みだということです。神様の前に自分の罪を告白して、赦しを求めることができるというのは、当たり前のことではありません。「悔い改め」をすることができる権利を私たちが勝ち取ったのでもありません。ただ忍耐深い神様が、本来であれば示すべき怒りをみずから耐え忍んであわれみをもって、私たちを滅ぼさないうでくださるからこそ、私たちは「悔い改め」をすることができるということです。「悔い改め」は、まず何よりも神様からの恵みでした。それが一つ目に私たちが読み取ることのできる事実だったのです。

## 2. 悔い改めとは神様に立ち返るもの 3節

次に、「悔い改め」に関する二つ目の事実として挙げられるものは、「悔い改め」とは神様に立ち返るものだということです。3節にこのように続いていました。ゼカリヤ3:1「あなたは、彼らに言え。万軍の【主】はこう仰せられる。わたしに帰れ。——万軍の【主】の御告げ——そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の【主】は仰せられる。」と。さて改めて考えてみてください。私たちはこれまで「悔い改め」ということばを何度も用いてきました。そもそも「悔い改め」とはいったい何なのでしょう？いったい何をすることを神様は悔い改めるといのでしょうか？そのことを理説する上で鍵となることばが、まさに今読んだ3節の中に登場していました。ここで「わたしに帰れ」と訳されていたこの「帰れ」ということばです。

### ▶「帰れ」

この「帰れ」ということばには、「立ち返る」とか「180度向きを変える」といった意味が含まれていました。このことばは、聖書の中で悔い改めを表わすのに頻繁に用いられているものでした。実際にこれと同じことばがイザヤ書の中でも用いられていますが、そこでは悔い改めると直接訳されていません。イザヤ1:27に「シオンは公正によって贖われ、その町の悔い改める者は正義によって贖われる。」と書かれています。この「悔い改める」と訳されていることばが、ここで言われている「帰れ」と同じことばになるのです。そして、それゆえにこの「帰る」ということばと「立ち返る」ということばをよく考えてみると、私たちは少なくとも二つ「悔い改め」に欠かせない大切な要素を読み取ることができるのです。

### ●真の悔い改めに欠かせない要素：

#### a) 罪から離れること

「悔い改め」には罪から離れること欠かせないということです。立ち返るのです。私たちが何かから「立ち返る」ためには、何かから180度向きを変えるためには、まずその何かから離れないといけま

せん。神様の前に罪を犯した者は、その罪から何よりも離れようとし、神様に喜ばれない悪や汚れに気づいた者は、そこから背を向けて自分の身を引き離して、そのようなものを拒んで、関係を一切断とうとするのです。しかし同時に、「悔い改め」はただ罪から自分の身を断ち切るだけではありません。向きを変えるだけではないのです。

## b) 神様に立ち返ること

二つ目に大切な要素は、「悔い改め」は神様に立ち返ることが欠かせないということです。「悔い改め」は、罪との関わりを持たないようにするだけではなく、それに加えて神様との交わりをほかの何よりも持とうとするのです。そしてこれは私たちひとりひとりにとって非常に重要なことです。というのは、私たちは時に、「悔い改め」の話になると、こんな考えや思いをすぐに抱いたりするかもしれません。自分が犯してしまったあやまちに気づかされたのと、だからこれからはそのあやまちをしないように気をつけていきたいと思います。これからは悪い行いをやめて、むしろ良い行いを積極的にするように私は心がけていきたいと思います。これまでの古い生き方ではなくて新しい生き方をしたいと思います。どうでしょう？一度はこんなふうに考えたことがありますか？「悔い改め」ということばを耳にすれば、私たちはすぐに自分たちの行動や態度、考え方を変えることに思いが捉われることがあるのです。もちろん古い人を脱ぎ捨てて新しい人を身につけることも、神様を悲しませる罪から離れて、神様を喜ばせる聖さを求めることも、結果としては、「悔い改め」の中に含まれています。

でもここで神様は、ゼカリヤを通してイスラエルの民に向かって何と口にされておりましたか？神様は良い行いに励むようにと言われていたのでしょうか？正しいふるまいや態度に「立ち返れ」と言われていたのでしょうか？そうは言われていませんでした。神様は、ただ「わたしに帰れ」と口にされていたのです。言い換えれば、真の悔い改めは、私たちが行動やふるまいを変えることではありません。なぜなら、もし私たちが行動やふるまいを変えることが「悔い改め」であれば、この世の人でも同じように悔い改めることができます。自分のしたことに罪悪感を覚えた人たちが、懸命に努力をして自分の行いを変えることが「悔い改め」だというのであれば、実際に、自分の力で行動や態度を変えることに成功している人たちは山のようにいます。

しかし、神様が求めていたのは正しい行いをしなさいではありませんでした。努力して新しい生き方を目指していきなさいと命じられていたのでもありません。神様は、ただシンプルに「わたしに帰ってきなさい」と言われていたのです。つまり真の「悔い改め」は、何よりも神様を愛し、そして神様のもとに素直に立ち返ることです。さらにいうなら、本当の「悔い改め」は、ほかのどんなものよりも神様のことを心から愛しているからこそ、神様の忌み嫌われるものからはどんなものであろうと離れようとするのです。先に行いが来るわけではありません。神様を愛しているからこそ、私たちは神様が喜ばれることを喜んでなそうとし、神様が忌み嫌われていることは、どんな理由があつたとしても忌み嫌って、そこから離れようとするのです。

私たちは普段なぜ悔い改めることを望むのでしょうか？なぜ私たちは、悔い改めるのでしょうか？それは私たち自身が、正しい行いをする者となるためでしょうか？それとも、私たちが愛している神様をますます知りたいと願うからでしょうか？私たちが神様のことをどんな時も考えて、神様にどんな時も信頼して歩み、神様をどんな時もほめたたえて、神様を心から礼拝したいと願っているからでしょうか？果たして私たちはその偉大な神様を愛しているからこそ、神様のもとに帰りたくて何よりも望んでいるのでしょうか？私たちは、正しい行いをする、より良い生き方をするために悔い改めるものではありません。私たちは、神様を愛しているからこそ神様が忌み嫌われている罪から離れて、神様が愛されているものを求めていこうとするのです。神様は、「わたしに帰れ」と言われておりました。それこそが真の「悔い改め」の本質でした。

## ◎神の約束

しかし、「悔い改め」に関して、神様はこれでことばを終えていたのではありませんでした。3節で「わたしに帰れ」と命じたその後、神様は民に向かって、ひとつの約束を与えていたのです。3節の続きに「わたしに帰れ。——万軍の【主】の御告げ——そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の【主】は仰せられる。」と書かれています。すごい約束を神様は口にされていました。「わたしに帰れ」、「わたしに帰っておいで」、そうすれば「わたしもあなたがたに帰る」と。もし私たちが悔い改めて、神様のもとに立ち返るのであれば、神様ご自身がその者のもとに帰ってくださるというのです。これは、ことばでは言い表すことのできないほどのすばらしい約束でした。

というのも、たとえば、イスラエルの民はどんな存在だったでしょうか？彼らは、神様の前に数え切れないほどの罪を犯し続けてきた者たちでした。聖なる神様の前に、忌み嫌われる悪を積み重ね、実際神様は彼らに対して厳しいさばきを下さることだってありました。彼らは、まさにバビロン捕囚を経験したのです。人間的に考えてみれば、そんな彼らが神様に悔い改めて、赦しを求める時に、神様はそれを退けることもできたでしょう。もしくは、赦しを与えましょう、しかし繰り返し自分に逆らうようなあなたたちとわたしはもう二度と関係を持ちたくありませんと言って拒むことも神様にはできたでしょう。しかし、あわれみ深い神様は、そうはなさいませんでした。たとえ数多くのあやまちを犯していたとしても、余りにもひどい罪を犯して、神様の前に立つのもふさわしくないように思えるような者だったとしても、神様は、変わらず手を差し伸べて言われていたのです。「わたしに帰れ。——そうすれば、わたしもあなたがたに帰る——」と。これがイスラエルの神様でした。

そしてこれが、今の私たちとともにいてくださる神様と同じだということです。だとすれば、私たちはこの神様のもとに、どんな時も喜んで立ち返りたいと思いませんか？忘れてはいけないのは、私たちの神様は、確かに罪をそのままにされるお方ではありません。この方は、罪を激しく忌み嫌っておられる聖く、正しい神様です。でもそれと同時に、私たちが罪との戦いに苦しむ中、私たちが心から悔い改め、神様のもとに立ち返るのであれば、神様はいつでも喜んでそれを受け入れてくださるだけでなく、私たちとともにいてくださるのです。果たして、こんなにも恵み深い神様を愛して、神様のもとにいつもいたいと、神様に日々立ち返ることを望んで生きているでしょうか？神様が忌み嫌っている罪があっても、そんな罪よりも私たちにとっていつもともにいてくださると約束してくださった神様、私たちの弱さをわかってくださり、私たちの苦労をわかってくださり、私たちの戦いもすべてわかった上で、なお私たちに赦しを与え、私たちとともにいてくださるとそう約束してくださっている神様、この神様以上に私たちは罪を愛しますか？愛さないのであれば、いや愛せないのであれば、私たちの行くところはただ一つです。私たちは、悔い改めて神様のもとに立ち返り続けようとするのです。

かつて、ヘブルの著者がこんなことばを残していました。ヘブル13：5-6「5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いまもっているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」と。私たちにこんな約束をしてくださる主とともに歩むことを何よりも喜びとしているのでしょうか？主は、覚えておられるお方です。主は、約束を必ず守られるお方です。その神様が、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」と約束してくださっていました。だからここにも書いています。金銭なんて愛さないのです。金銭以外のほかのものだって同じです。それ以上にすばらしいものを知っているからです。そして、そんなにすばらしいものを知っているのであれば、神様が忌み嫌われることをなしたその時に、私たちはありとあらゆることをしてでも、そのようなものから立ち返って、ただ神様のもとに戻ろうとします。「悔い改め」は神様に立ち返ること、それが二つ目の事実でした。

### 3. 悔い改めとは緊急性を伴うもの 4-6節

そして最後に、三つ目の事実を考えてみましょう。「悔い改め」に関する三つ目の事実として挙げられるものは、「悔い改め」とは緊急性を伴うものだということです。ここまで「悔い改め」のすばらしいさまざまな部分について触れてきたゼカリヤでしたけれども、終わりに一つの警告を民に与えていました。4－6節にこう記されています。ゼカリヤ1：4－6「：4 あなたがたの先祖たちのようであってはならない。先の預言者たちが彼らに叫んで、「万軍の【主】はこう仰せられる。あなたがたの悪の道から立ち返り、あなたがたの悪いわざを悔い改めよ」と言ったのに、彼らはわたしに聞き従わず、わたしに耳を傾けもしなかった。——【主】の御告げ——：5 あなたがたの先祖たちはいま、どこにいるのか。預言者たちは永遠に生きているだろうか。：6 しかし、わたしのしもべ、預言者たちにわたしが命じた、わたしのことばとおきてとは、あなたがたの先祖たちに追い迫ったではないか。そこで彼らは立ち返って言った。「万軍の【主】は、私たちの行いとわざに応じて、私たちにしようと考えられたとおりを、私たちにされた」と。ここでゼカリヤは、かつてのイスラエルの先祖たちが、犯した大きなあやまちを思い起こさせていました。いったい彼らのどこに問題があったのでしょうか？それは、彼らの頑なさにありました。先祖たちは、さまざまな預言者たちを通して何度も何度も語られた神様の「悔い改め」のメッセージに一向に耳を傾けようとはしませんでした。神様からの警告に関心を払おうともせず、その忠告にいつまでも聞き従おうとはしませんでした。彼らは決して自分たちの罪を認めようともせず、罪をへりくだって、悔い改めようともしなければ、神様に逆らい歩み続けていたのです。それでも多くの人たちは、別に罪を犯したところで大した問題になりませんと思っていたでしょう。悔い改めなさいという訴えをたとえ無視したところで何の影響もないでしょうと。また機会がある時に悔い改めたとしても、今は別に何の結果も伴わないでしょうと。

しかし、その結果どうになりましたか？みんな見事に滅ぼされました。みんな見事にいなくなりました。約束されていたとおりに、彼らは主のさばきに遭いました。神様のことばは、神様の約束は、うやむやで終わったものではありません。まさに言われていたとおりに、頑なに悔い改めない者の上に成就したのです。だれひとりとして、権威ある神様のことばから逃れることのできた者はいませんでした。忘れてはいけないのは、あわれみ深い神様が恵みによって与え続けてくださっている「悔い改め」をいつまでもみずから拒み続けるのであれば、その者にはそれにふさわしい結果が待っているということです。イスラエルの先祖たちに下ったバビロン捕囚というそのさばきは、空想の話をしているものではありません。私たちに歴史的な証拠を与えてくれます。すべてを覚えておられる神様は、ご自分のことばと約束を必ず成し遂げられるのです。だからこそ神様が「悔い改め」の機会を恵みによって与えてくださっているのであれば、その時にへりくだって神様に帰ることで。

確かに、私たち自身も自分の間違いやあやまちを認めることを心苦しく思うことがあったりするかもしれません。自分がみことばを読んでいる時に、そのみことばの真理が私たちの心を責める時、私たちはその真理に耳を傾けたくないと思うことがあるかもしれません。ましてや兄弟姉妹が自分の罪を責めるような時、その問題に触れたくない、そんな問題を見たくない私たちは思うかもしれません。しかし、そんな時こそ思い返すことです。私たちが、罪から離れて神様に帰ることができるのは恵みであって、私たちにとって何よりも喜びをもたらすものだということです。だからこそ「悔い改め」を求めるその声を耳にするのであれば、イスラエルの先祖たちのようであってははいけません。その声に素直に耳を傾けて、神様を何よりも愛するからこそ、あわれみ深い神様を求めて、この方に立ち返ることで

す。ペテロもこんなことばを残していました。Ⅱペテロ3：8－9「：8 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてははいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。：9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と。神様は、昔もいまも変わらないお方です。主は、覚

えておられるお方です。この方は、罪に対していまなお変わらずに怒りを燃やしておられる聖く正しいお方です。そして同時にこの方は私たちが想像できる以上にあわれみ深く、忍耐深く、そしてご自分のもとに帰ってくる者たちとともにいてくださるお方です。果たして、あなたはこの恵みの神様の前に、立ち返る者として歩んでいるでしょうか？それとも、この神様以外の何かをいつまでも愛して「悔い改めよ」と、「帰っておいで」という神様の恵みの御手をいつまでも拒んで、そして約束されているさばきに突き進んでいるでしょうか？ぜひ皆さん覚えていてください「悔い改め」は、神様からの恵みであって、神様に私たちが立ち返ることです。私たちは悔い改めをもってあわれみ深く、愛にあふれた神様とともに歩んでいくことができます。何ものにも比べることのできない神様とともに永遠を過ごすことができるのです。だとすれば、神様の前に立ち返ることのできる喜びを神様に感謝しながら、日々悔い改める者としてともに成長していきましょう。